

コ ラ ム

製造業離れと工学部離れは阻止できるか？

最近、大学卒業生の製造業への就職者が少なくなっていることが話題になっている。確かに、図1から分かるように、1986年以後の製造業就職者数は急減している。しかし、1973-79年でも減少しているの、最近の減少は一時的なものと楽観視する人もいる。ところが、1973-79年の減少はオイルショックによる不況によるものが主で、求人が少なかったため、製造業に就職したくてもできなかったというのが実情であろう。一方、最近は、図1から分かるように、製造業が好況で、求人が多いにもかかわらず、減少していることに注意しなければならない。

さらに、図2には1983-88年における製造業、金融関係、サービス業に就職した工学部卒業生の大学入学試験偏差値を調べたもので、製造業では偏差値上位のものが著しく減少し、金融関係では、著しく増大していることが分かる。偏差値のみから判断することは危険であるが、製造業には優秀な人材が集まりにくくなっているものと思われる。ただし、金融関係に就職しているのは学部卒業生が主で、大学院卒業生は少ない。従って、工学部卒業生に限れば、今のところ、まだ優秀な学生は製造業に就職していると言って良いであろうが、将来のことは分からない。少なくとも、文科系の優秀な学生を製造業に集めることは極めて困難なようである。

図3は工学部志願率と製造業への就職率を比較し

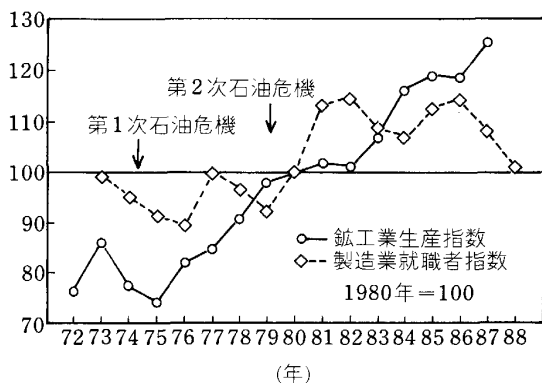


図1 製造業の活況と大卒男子就職率の変化¹⁾
(通産総計/日本統計月報)(学校基本調査)

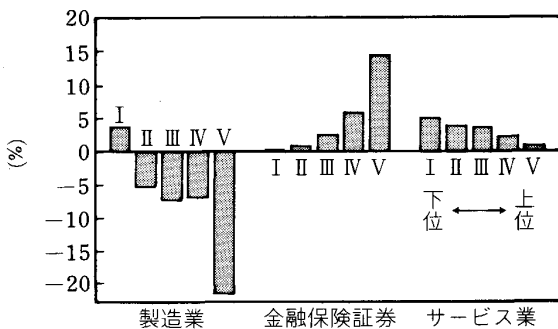


図2 工学部入試偏差値と就職率の変化
(1983-88)¹⁾(リクルートリサーチ大学別就職先調べ、佐々木ゼミナール88年入試ランキング)

たもので、両者の相関はかなりよさそうである。すなわち、製造業離れは工学部離れとも言えるかもしれない。もし、これが事実であるならば、製造業関係者のみならず工学部教育者にとっても重要な問題である。

工学部志願者の減少の原因としては、(1)エンジニアより金融関係のエキスパートなどの方がかっこよく、時代に合っている。(2)学生生活を享受するには実験やレポートに追われる工学部系より文科系の方が有利である。これは今も昔も同じであるが、昔は将来良い生活、あるいは生きていくために、やむなく工学部に進学するものが少なかったのに対し、現在は生活や就職の心配がなく、工学部に進学しても必ずしもより良い生活ができるとは限らないことが大きな違いである。(3)工学部では薄汚いところで、ゴソゴソ汚れ仕事をやっているイメージがあり、かっこ悪い。(4)女子学生が少ない、などがあるようである。(今後、高校生にたいするアンケート調査が必要である)。

しかし、いずれにしても、我が国の将来にとって、製造技術をより発展させることは重要なことであり、良い人材を確保することは非常に重要である。このためには、製造業において、待遇、環境の改善にいっそうの努力が必要であるが、工学部を魅力的なものにするための努力も必要であろう。例えば、老朽化して薄汚い、経済大国のものとはとても思えない、現状の工学部の建物、実験室を建て直し、明るく、快適なものとする、単なる、技術としての研究、教育ではなく、文化としての研究、教育も取り入れること(特に科学は文化と言ってもよいのではなからうか)、女子学生を増やす努力をすること、面白い、夢のある研究、教育を増やすことなどが考えられる。このようなことを言うと学問教育レベルが低下するとおしかりを受けるかもしれないが、今のままならばレベルが低下しないという保証は全くないし、上記のようなことを実行したからといって、低下するとは限らないのではなからうか。諸兄のご意見をうかがいたいものである。なお、図1-3は文献1)から引用したもので東京工業大学社会工学科小林信一先生にお礼申し上げる。

文 献

- 1) 小林信一、他：大学卒業生の就職構造、日本教育社会学会大会(1989年10月)
(大阪大学工学部 大中逸雄)

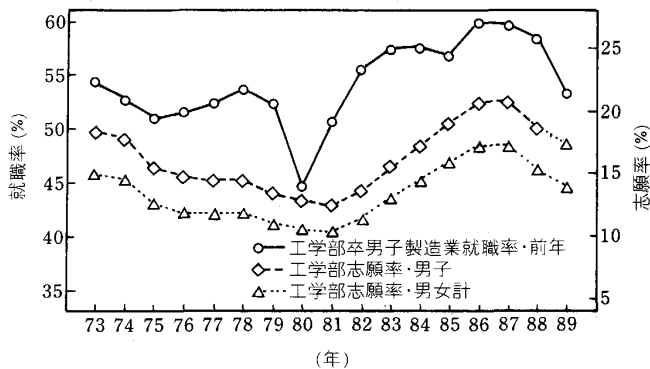


図3 工学部志願率と製造業就職率の変化¹⁾
志願率=(工学部のべ入学志願者数)/(のべ入学志願者数)(学校基本調査)